大鏡第四

特別
リ5
12897
4

[illegible]

[illegible]藏書

道澄　中関白内大臣

尊朝　粟田町殿右大臣

東之参殿息

昭和三十九年八月七日 村井順氏 寄贈

59-6599

一 内大臣道隆 正暦六年二月日依病辞関白 四月六日出家十日薨四十二

このおとゝハ東三条おとゝの一男也御
母ハ女院の同腹也関白にならせ給て
六年はかりやおはしけん大疫癘の年
こそうせ給へれ されとその御
やまひにてハあらて御みきのみたれさせ給ひ
しなり 男ハ上戸ひとつの興のことにす
れとすきぬるハいと不便なるおりおり
侍るや 祭のかへさ御覧すとて小一条大将済
閑院大将と一つ車にて紫野に出給ひ

京極文庫

ぬ鳥のついかろくもにつくさ給て
御輿よせはおりくしもすれはおかみさき
なきてめ今日しそれくまくりしたる
そてともやさる給をみおもてやりしもてさ
させかしらくはい御車のさくらかさね
みるあけくさむすりの御さくりたるをて
おりしもけるいこゝろとりたれしか
かくさるの大将殿をも御気色みつる尊給まて
出給ていとかなしう御信もしておりしか
みなさまもみともおほして御誦経もとめら

人々て御車さしよせて人々まうりての給
とそいて御輿のかしにさせ給て仏の御
前のあれさへいとらうしうしくさせ給
給ひ御物語の日は給ひて二条の御経
そうしゆうてるさりしうりさるゝよその
御時のへ給御物語てんうそくの大かうつけ
とをさしてうりくあこしうめくもまして
ててふ宮にさうめく上給にきさ給さ
やりくのけさいれさうのちうしくもかて
おもとまもかくのこうりぬ一の宮にかて

あみ堂にまゐりしに、くはんをつくるに御
は入道の前の松のひとりまちつゝてに
らんとするにまうしけるわりしきまさは
あやしとおもひまゐらせはなくはかなく
単のおもひしかたなるをかなしきは
あし四つてゆあはれなるかなしまいらせ
てくはなきはは入道殿よりさきをふみつ
はきてあるこゝたまははせ輳のとかり
なやうやとの扇となしたまひてせ
ゆつてかうまみのねしみ寄夫責の将の
こそとおもひくにまひとそまゐりかくと
かくさうの御意になしてをかつきし
かうろしゆつりとうそつるひ
なとしくらうきそうらひけるさま
くこそしけにかりしけまいらせ
酔あん人は其事にかきあることも
この殿のいふかいらくかりしけるみゆ
ゆれなくかりてもたまはせさうしけるや
の踊付くしとかはけの何西なうきしもまゐり
て今御中さをみつて人くのまいらせ

けふは舟岡花ならや極楽にはあらん
さんと仰せけるこそあはれなれさるほとにいや
はなくひかりしらすまてあの地獄の
りくんのかさをしら打あて三宝の御名
思ひせんかたのやみをとなへやいつら
のいとたうしは我ありしいそや佛教は
天下統りの宮古にてしせまするそ代記
御殿の内弁にて菜成つけるは心藤い
うちさめく心得来てえにしさり奉
田辺長ききし扉のこれかきり出さとさま

ひしとて長押にすかりつゝなけく女
房衆はよりてこのやうすをみまもる
始しなんいとあはれなりしとくついとき
そろかなりつんにてやしなひつゝさとなく
さらしにあてゝわけそしてく痛ませて
しはらく思いつくへりけるてかうへみて
ところ或いのはのは此うの給ふに付させ開白
も腹しは男子女子おはしけるに有しかこ
今の中はわけの給ふ消滅の御しれは女
はの世にある二位とそいはひ給ひて後

の御裳着日その入道殿のうへに御しのひて
いさせつゝまゐらせ給ひきこれをみたまふ男
君二所女君四所おはしましゝさきの大殿の君
一条院の上におはしましゝ上のはらにおはしまし十
みこそやむことなきをおもひやてまつりしの后
一品宮を御中にとやしさまにこそ
とおほしめすさりともとさをおもひてあるを
御しとそ世の人はいまさやかなるへかりし
まて関白殿をしらせ給ひや御ことはこなたにこそ
又二人女みこ三人ときこえ給ふ

女君は入道の御まこにて三のみこのおほ
きさきのみこにてしをさきの御こと
男親王敦康親王とそ申しゝ
しうおもひし世の中にいは
しすさまてしをおもひ年はさらにてあ
さふしてやむをおもへる冷泉院の
あちなきのやまとはなれはしまさ
くにはうへやまかなし人のやまと
さはしけれはいつしかもえぬる
てらそはしまさてこなたの母后

の末中比の家ハ三条院の東宮と申し
けりの佛業会とてなるやうをおひしも又
殿うせ給ひおしつゝ佛事十二三ケりまで
よそほひもめでたきのみならず冷泉院のみな
佛事と申しとこそ文章とよ承ります
せられけるもはしくやかて此中にまします
うきよ思のうへ一条のうちにしてあやしくて此
ころとてよしなしまてうやおいく
なみにこそかなわて見しましけるほどに
こゝろのとゝすし給つけるとりや君字文

とのまいりしころありハ西こまでとふしとぬりやる
さしすてゝ引上てころくひろげてしらる
まいりけるを見て家を西面にちかよせてあんかしこ
御しけの様くて西のふしまへちしりて
らるゝしてあんなんもえしうよむちある
りけるか家あちうらくしうしきりし
あきうせらるゝてものこそおほえぬり
ときそおりをさうれ文字をてこめしわ
つきて作文しまそせ給ひけるに会
と三十余りの屏風のうえうなけ

こゝにてつくらし給けるは、みさりしかりしをに
くしては、すまれとこの庭にて饗庭せ
てうちまゐらせひけり金給ふりしにたまはれ
ともいてきこえしかしもよろこひて
後にやささせなれへくみ侍りて讃せ
させきこえしかはいとめてたやうに定かに
も高二位の新發は流りてこの御
ろしはふ侍しの有ましうし毋上
大高（たか）内侍なりしされと局上えせられけり
きこえ給ふ節会なとをは南殿にて宴にて

されはまことしき文者にて御前の作文には
文奉らしはのをとこにはまさりてく
そ聞え侍りしかそれ此権帥ありけり
も大盤所のうちの人宰相殿の
上の壺殿なるをとりて二間なるん
さひたりけるとそきこえし古代は
給ふや女のあまりさえしうきは悪と
人の申なり此内侍はいといみしう
堕落せられけるもそのゆへとこそ覚侍し
かくてその男のうへのさし男君四人おはせ

帥殿と申しける人いとらうくしうて式
部の宮の御母代にておはしましゝをうつ
なりてせさせ給ひて一腹の女君たちみななり
對の御方と申しき二人の御腹の女君
おはしけるを今の皇后宮にはおはしまし
みてまつれ給ひし男君達は右大臣伊予守
仁の君の御あにゝておはしける大子与君ぞ
生れ給ひける御子にまゐりてまつりける
て右頼宗卿君とぞ申しける左衛門
まで成りまさりて父の御後をおもひし

年乃六月十一日よりはしめさせ給ひて
御子のさかりとそ申しゝ御ほとゝ思ひいとさき
ものにあまりあるしさまして地に
りおほしやりてわたらせ給ひつくそ
おとゆるしくも見給ひていとうつくしくなれ
わたくしてわたらせ給ふに入らせ給ふに
皇后宮と同腹の君法師にて十余の頃
に僧都になりしとてそれと二十
六にて成らせ給ひき今一所は小今与君とての
かくしの大子与君がいとうるはしくおはしし 七

一とせはかりのほとに内大臣になりたまひ給て
我もわれもしに長徳元年の四月にうせ給ひて
くなりきこえに四月に粟田殿てうせ給ひけれは
りおやこ(?)のかたに内大臣伊周のおとゝは右大弁(?)
天下執行の宣旨給はりつきしをいかにさ
しめ給ふに我は山井殿(?)をもおはしてしかは
内大臣殿と関白殿にてよの人おもひ
まゐりしかとも帥殿になりならせ給ひしかは
事ともいてきことくしやすくてたゝ
けふをかきりに一家につゝしきこえにはかにとき

まいりかよひつかうまつりし人々のことく
みてをおめしいひしその道殿その年の
五月十一日よりしてまことにおもしろくいみ
は后にいとゝねりしましいらし文
のち花山院の御まねにてて御出家仏位しう
まして出羅城菜の栖佛になりて長徳三年四月
ちる日よこなたくり給ひしそ御ち三
いへうれかへしししてさかき
よろしもてやのまま我ねとつりて帰
さ給ふしたわしてとろへぬすみにあまり

尊人のまゐりしかも二条西にもあるにさ
まて給ひけるしに小野の山までそ行く
ひてなからうしほとにもあはれなること
落ていにて見ゆるにやかへをかへりしなく
新しくなりんぬるしまして又さてくわりし楓
西部の宮の山まてさかへりの流れにそては
めしいれさせたまふまてきて太后はなかとし第
宣旨うしふすなかくあまさかへし〇〇
もいと落居ていれほし給ひしさりさいとと
なりしことおもいらせまし給ひしまれなく

てのちまゐりせさせ給ひけるは小陣より一せ
ちひく西の御方におはしましてそ入道殿
まてさせ給ふほとなかなか梅壺の東の廂のつま
まはやへいとおもしろくみゆる帰るなみ
侍人しけきにそへそうしつさまのあ
て梅壺の廂にゆきかよふとさうちかく
おはしにけりとものらんとておやしと人々を
まてさせたまへるしもなかりしあ
めしとひしかは随身のこゑさして
あらくはさふらひてたにみかへさ侍る

いとらうらうしく出てと帥殿の御もとの人々
あさましくおもひあへりけるに
人々まてこてやうにおほえぬほとのさままゐらせて
登花殿の御かたよりも都へまうしてよ
おひてやかてほられけるとせさせこと
ろうそ故人いとわりなくおほえて
しられなりおほしなけきとみたもひていと
まそかくのことく身をけさとそれはしけはつき
あはれなれともて花やかなりしありさ
かなしくこそ侍れとてやみにきこえさせ給へとくやしく
なかりけりしまゐらせつれはかなしとて文
入道殿のいりまゐりしをわたしたまへて帥
殿のあたりの御ことなりあるへしとき
こそてはのたらしさよとわすれぬを給ひて
あはれにこそ世の人も枝殿もうけ給ひし
なりゆく人のやうをいとかうとうしく
おほされあつかひさりとてあるへきかたなれ
さりともの御ならひなきさまにて
帥殿いとかなしう世の気色の見えかれ
りくゑ文さむるいとかしくてわかれさ

まてきびしく雙六はしくまつていとさ
らしきにはじめわらひそて双六の拝して
しかたなき御ゆへ御氣色などもてみなす
つべきをえもいはずまいりていとわかれ
まゐらんとてまいりけるさぶらひけるとき
をぬきんでゝいるをしもなしくるてる、
させたまひけるを入道殿たまはりてなさ
けれどもまするゆめゆめくへのきちかんて
とかくへもまうしくまてまてかせ給ひ
これゆくさいらしくてなひあんなさく

あそばしけるにはしつまりせ給ひて叡
本懐をとげてあそびけるにかたう人
もて候ふことも候はでそれとは人えしらせ
やさしりけるいつくしさおはしけるものを仏を
建礼門院もうちさはかせ給へとものゝふよ
いおそしきにけるおとしとさもあり
声もしはてそらはとひてさせ給ひけり建
とりやしめとらへ御前にはかなきにまはり
てみてまゐてさせ給ひけるとて今八十二番の
おりしまもとめりしさ神にまつりかみ人

もさへこそきこえは追従しとも申けるし
かゝれとての帝業文をしてさむまれさを給へ
ありしさまともおほしくつされて月ありつゝ
病しつきぬへく寛政七年正月廿九日にを
させのひましそうし御歳三十七とそきこえけ
給しうきの風の病とてもいとうしくうし
ありけるまもなくけ里の御きてかさ病や
なとそおりしけるかくに給へ給れは御法
せんとて増益とまゐりもおほさはいてはさん
とて道雅の君と供して入道殿に申給ふ

けり御こゝろすかけてくるしきこゆまりにけさ
そやうくうらしみもしはりてくらきに
きゝ給へれそこそさせまへは御前参りかてき
くのこともて御法そしらんとつらしまいりせ
阿闍梨にまかてくるへも人をめと給へらん
とやまつていとふ夜なるにやうれそ
まそさを給そくらけさいさやうなる御いら
ういとくてしきゆかみてあるくれとい
うしつれにるせ給てされとめしゝ御
まゐりおそなとくうしらうを給ふ
か

むかし河原院とてあまた世の中におほえなか
りける人のいとくなりのうるさかりやう
しくおほしまして物とやかしこえさせ大
納言のやうしやいまし給をかくみ入まゐる
なとをそれさせまうつ殿の御こゝろより
給りてかいかなしとい人をとしかるそ
し給ともしきもちてかほとなからさて
大原大納言殿のむすめはなる女君二
所男君三所おはせしかは君たちまうてて
とまりぬひとさくしそらはたうとしつき

おほ思ほしほとにさるへくおほゆるかと
もとりかひく心地あらしておほしめしひなきたれ
姫君達ともへなにかくたちいのつかまつりとはまはひ
けれは御仏神にまうてゝかくりすかに
つまもなかりけもまめやとかくてなに入る
給にけりくいつとひなさまのまつりへしを
のたまひしさうまうでつる君たちとあはれ
秋のよしにさましかなしたのふかいかな
へりけれなかいつかたはかきよせひ
ありさまもしかれはとてまゐりにけり

くれまちへはなみつきもとへひつけて
みえをうたむやしきあらそひくれしゆく
おぼえはなりともしらしやなし人とて母少将
ましなく遣てしめひかりつその君
左近大将君は高松殿の春家大夫殿の少将
にて有ましの光るらしく侍りてなりと
なりたまひしうへさてなりもて今一品を
大夫はとくりて御殿のめさまていとやむ
ごとなくて以後なりしをおぼしけむ帝
ありさ給ふなるきあくれ侍るゝ男君

松君とてむまれ給ひしより祖父おとゞい
みじきものにおぼし山ふかくすみ給ひ
あるにとくりものとてさるを御乳母に
發意しあひし君そしてのちに隠
てかくれてまたての君と父おとゞ宮より
なりにしひとのあるまじくもてなし入寺
てかくしてみおぼしめし寓なるして
さらなるて心をくいてやうやうなりしうく
おそらくしとくなひのけてさるとて世中
にあらぬひなくへうて出家してやうとめく

くらゐおほせ給けるに此君当代の東宮
にておはしましゝかは御をはにおはしまし
ていとやむことなくてまゐりしほと
に春宮亮通雅君にていとおほしおほし
きこしめしけむしもえん位につかせ給
しほとに蔵人頭になりかはりて院宣下の君
に三位なりしのひて中将と申にうき給
そとなりにしをいとうれしかりしとて
うしなひ給ひしく思ひけるとしも此君
右近中納言雅仲の女をはしまして男一

人うまれ給へりしは法師にて明覚僧正
の御弟子にておはしますめり女君ひとりおはし
ひめ宮にてさふらひ給ひけり今の皇后宮にて
まいりて大和宣旨とてさふらひ給ふなるへき
又は其の妻子とやいふ女のこほりける
中にしろしめしてありてまつりておはしまし
くれてなりけるあはれおほかる童部の
子やうに給はりしかは白髪をそりて
早くうきことおはしく侍りなれはしきさんを
中にみないつしかもなの行かれにしとて

くもゐ路をいでゝおもはれけるハ彼君し
きこゆる人つねにまいりかよひ給ふが仏
法ハこの国にもまれさせ給ひし七歳り
欽明の御代にわたりそめにし中に
聖徳のまつりごと本願をおこしてさまざまに
をすゝめさせ給ひしより此かたの人びとを
つけそめまいらする都をはじめて
まいらせしめしぞかしさゝにいまも
女房たちこともおほかりしをやうれしからぬのみぞ
法もさまざまにてきこえさせ給ふこそて侍

聞しさせ給ひつゝひまりておもくさせ給ひて女
くそくをかきたまへ侍らずして侍る
てまいらせ候へくゆかしやひまけこゝろみ
仏法のため一般の十六にて中納言ぞなく
なりしてその中にも心ありけれど給ひて
し法の行人多くハ物知ずあらし出見石
乃ゐのし里ゆへりて出雲権守ま事て
仏ぞまで行きし仏法いふ中納言は
里は厳乃かたり給ふてもとの中納言ま事
好文なしてたるゝいつかうしまはりかはて

つたへきゝしにたがはざりしは女人の身にかなはれ
ぬるよしをきこへしかば御前になりて
喜すさましくおぼされけるにあさましき
みは如何なる事ありてもつかまつりぬべきも
よろしくてかなはざりしことをしろしてこの
此車をのせ申しをはりし所帰らせ給ふ
なりつけてよひとせのきよくのうちの中
おくていひてを世間にはいひけり
そこをうたてかなしけむにしかするに
かりしうちも寂昔になしてみえて

うちつれて給ひましけるにやりそらになまい
りたまひしや天道てらへ人とおもふに
あさき後なやりまのみなせし給ふ中にたよ
おきてとくをとむる所に彼はからしく
このの後よのありけるにそれしこの為におく
とかくいやしくも仰らくそ御所ゑい
ききてもやめしさせるひけるこの中納言
為いふやうにえかりなさくらの御所
しちかあらず給ひてといはれしへのやうに
とましかひかるへてなりけりし給へ

土御門殿まで御越あるまじきのよし申けり
権中納言のたまはせてけりしかれば
のみきせてまろし御思ひ関しまゐらせしほど
酒杯ありてまゐらせになりて人々こゝろもとなし
ひともとしやうてゆるされける中納言まゐり
たまはしくしなりてかまひけれしと
すまれけれ是を承りて此ひもとくせ給へまうと
やすみれ給ふへしとゆるされきはらま
てて遁世し給ひと云伝へ給はるしろかりしとき
なんとてよりぬる中納言殿御せうそこ

あしくなりて隠家を求めたまふはまことにあ
はそくもちよりやしまゐらせつるわたりをも
とありつるの給ふはへくのみもしきこえ
りたつ中ましての風情ありしけなく
てろくの御わかれまさかひつてそうて
きこえんとてうしろきこゆとおかしく
思ふに有るちうしそせ給てまふいやそのかみ
をまとりゆてありさんたる長きにて
まつりんとてうせ給てなかしとうきめ
てまつりきぬまておもてありつきこそて

てゆきしきなとりてさしとられつゝ直しと
りかくわたるへきひつれねかひよろこひし
あそこを世給けりさ後なとあらまほしくれ
ちしまし世にうるてつらしもてあや
宮しきせ給ひきりきて式部卿宮のまと
さりともしくしまち給ふ一条院の御すゑや
三条りせ給ふきさきに御前にまいりなとらく
御産をみ給ひけむ東の宮すそ
体ゐ奉きてあるれと被仰けるにあるれの
人物人やとてそやさ給ふしくこそあるし

きこそのたまひけれまゐりてたまひて
我か家のひくしかれはきこえけり
てをとこえくしうちたまひつりけるよの
人の京のみやすみありてこれ後御心ゝて
わし給へて天下給ひしをしまいり給へて
思ひやりしもし此入道殿の御孫のうちの
みけるまとりけるよもそも三条院の大
嘗宮の御禅ありそそつしさ後ゝ
まつ体ねりことなるしゝ人のうちきゝて
さりとも人くりそれ給はんとも思ひけらし

こまろとあるへんとおほしけりしあるうや
しなるところおりしかしこにて節会行は
るゝ時りきねをもちりもなうて草衣きく
てはしさをあつきいもみちつきねさく
人の御たる後龍膽の二重織物にてとち
てしくきらめきてこしめうをめぐりし
陽日のことなされおもひすましてとく
わうしうしこうこうりけくろえを
おもひしこともやまと絵てかましらひて
めつらしき武の御いそきそくしるを

のきありしは唐人の御はしらふうすあるそ
ともへんとおもしてらぬなりやか
おもひけるは三条院の御行にてみつよしく
くりやおもりかもんあさくたびなりて
あひてしまそうし手とあるに伊与守茲資
のむすめ三女そのかうのむすめ君二所なり
し三条院の御子の式部卿の宮よかしこ一所
帥宮の御子の今宮相々にて御子二所の御
子をもちまりもひてつしつうちさえ
おもの政ちくしたかつて舞楽の人さあう

らるゝことなりけり其後の大宰十人ばかりを
てのちかはるとそやすし。此国にわたり
しまさほど刀伊國の賊此国にとう
ちとしくとや思ひけん、らしてかくれはて筑
紫まかりねての用意もなくて大貳隆家弓矢
の道をさしておもふ所ありしかはいくさとわか
け、筑と山とあつめつゝわかさる人なて
筑後肥前肥後九国の人をわかちさけ
とをさる持まて府の内はいとまかりは人
をさへむしとりて合戦如ひけるそ

おのゝあ此ものともいとおほくしるよしけるに
さしこて家つくわりしますかへさい
かりしまかへりしけるへりし舟こしわ
かやけおほく大きなとしなさをかそへかし
まを出海らひさにまれはさうまわかて
なみそてあまさ此中に家を討ちてしる
すのともをこしてわはやけに参せられぬ
まうしつはこれおそさでかのさ積材はうらう
まなきれ其あは大宰監にまそてなきせあま
つりしよ此積材はそれしは純友さらしなりし

またすみとも純友は将門同心なりけるにて
おもふこゝろありけるにてかたらひて将門は
みかどとならんといひ、すみともは
関白にならんとおもひあはせて此世を
我と我とのまゝにせんと心をひとつに
契合て、ゆくかりは東国にていくさをおこし
とりて西国海よりおこらんともかまへしと
数千の船のうへに兵をつみてせめのほり
よし山の里をとりてすみかとしてあまたの
おそろしけのいくさをおこしてせめける

をきとして京へせめのほりなんとすを
きしことありけれは人のこゝろもさはき
きのうちはなかりし主藏おもしろきまゝへ
まりいそてさはかしかりしかはかりことを
さて壱岐對馬国の人をとらへて大貳国
はとりていくさをあつめ新羅のこゝろ
ろさしおほし弱き国をうちせめてひ
ておほきに従ふことなし此綿をさして
ありけるつりけるは彼国の従者大貳金三
反こゝをつかはしけるに

くつろしうまゝてめてたうに入る各形は帰
なくまて成りまひまし給をまつるなり
されとまや世もことなりさるさわはえり
てこそわらそられしうらいひてたる車の
しゆ河のあらぬ名もさりあへもそまつとりしあ
ろそうしこれの子男君とての藤大少将義懐
の君又右中弁隆輔の君又式部卿なとは
てわらそめりまことにはあひてえさやさ
あまつりしそりは帰殿も花山院とあらひ
まりやまさをあつりしいとよいとふかし

まそうりとなりしも我門そはらう
しく仰なけりし逸家まてりまり
まうり給しさらんとや給てそれ日に宮ら
きみ桜川きくの車にいろもちのの年のも
て帰為帽子直衣いとあさやらなさそてせ
めてきひそらの武織りのの指貫ましかた
いこさせさひて糸の人さ紫野そてせ
めふ君きゝのやまのたらくといとなんや
まふかしぬきさひてりそうちゝひとま
てまうれいとをうやうまきくあけく
雑

みな六十人ありしに、あるかぎり皆あく浄
行きたりしを好く院へまゐりなりてといふ者
勇鶴く法師原大中童子どもあ
るまで七八千人ありけるに石山寺へ
まゐりて秋の夜もすがら北南の四門はうち
ら陣より一条東洞院のうしろにある
くらかりてみちもみなこれらも思ひ信乃ま
わかやまちりし川きこゆるほどにあらし
してくさるまもその思ひしる上下の者
まあへつるきこえもいけはいくらもあるまじ

ひろきもせばきもあるかぎりして後さし
きみ見いれしに院を始めて中納言殿
車一両ありけるを始めてそのところなき
小さき門ありしまでいやりをはじめて
などえまゐり給ひて世給ふ院あり
あるけ所ひしもの見えもひとへにまかせ
後ありしてやりへしをふかとひと一度
まさひまりしあてそいとおひもし
あしかさみたまやを絶しとは王威を
いましきもみなりきりえあしそ成給ふ

御盃のまとひてけふのしきみ
うしとりはらまてそこらひめひきれ給へ
ぶちえさせ給ひけるとみしとおほえる
さぶらひてこしかたまできこえやうしに
帥とみゆ御むすめしとにふ君さらうちてあまる
物かたりし 物沢の御売頭同執事之承
つひしたまへしらなくありあひて今
是六郡大納言周防の兄弟かの兄弟なし
小一条院の御堂建の御乳母のまりて院
入給ふしてまふひかゝえりし文なの

少将とありし君は此家より関白殿の御子
とまてにうちしけるてよわりましく
かくゆきあやしくいふのしつしうしかは
あそめりしての入道京する事あり帥殿中
納言のまさかものにそ世給あれ

一 右大臣道兼
此おとゝは此太政大臣の御三郎粟田殿
とそきこえさせし長徳元年未
五月二日関白の宣旨かうふらせ給ひて同月
乃八日うせ給ひにき大臣まて出し関白

とかて七日こそ都しましいは殿りの御
そうしはやそてらしきうしなきらひあらく
都をきれともあしらり菱のやうあて
かさなつは出雲守相如のかしれうきそ了
白地は流りまいりし宣旨はちち女郎へり
さはあをしけつうひさうひうさまくしたえ
うり郎へ女さてゝてこそ佛法もあつまつし
てうそうひしゆそいろうひとてやさ
女郎ひしもみの御前はえもいとなりかつ
きりそくあらは小式の二条りそう

郎は御供人はよろしきもあしきもなをしなを
まて布衣なとそてあをもやりて候
こうしゐてくまいりてはこり郎ひし様
のとみちちの侍人へのちうさいつか
ほせあまりはもとみ人へもありきりゆあ
ちいそう例すとて都されなきとあ
つしのあそにてそそましまふ
人の御返ゆきうと都りてえうし
ちかまつ女郎つかはいとらすしなりせ
都女のかは度をまりはきくて返事都は

て御湯殿の馬道の戸口によ御おとかして
かりて小侍従かりといひてさとめよといひなみ
とらへてまつる度にハ常よりもしけ
いかりてやらせ給ふまゝに人へくなく
まて御冠もおとしなく成り御ひもとく
のけていとゞはしたなきまてわりさ
せ給へつまをとまりをみる御心ちもくゆましう
ならせ給はゝなにしきれたまうらきる
もとさてめさるゝにもとはけもねなかさ
りなりしうちよかれて御かりあまりさせ給ふ

いとおもしろくも覚えし今の小野宮
右大臣殿はいかゞひとすぢなりけり
やの御簾おろしてたひつきまいりたまへ
めでたかりし対面ありてそれゆつりのゝ
ありく絶りてとみまつ侍りけりてねはく
て中分かし辛苦あるさまにいつけて
いのちつきてよろこびのまうこそ
せらこのわさからい無事あれ給つまさ
てあんすまいりつとも今えうく侍り
なりて給いぬへうりける乾しやつき

にかんまうたふの中にも命人とよひたまいき
きこえしをそらうらしくおほしけるさま
にあんなりいかつやなてま阿やうなり給へ
と柳してくそうくしあてゝさくいら
あまりとさてむまてにぬいさしなとを
くるしけるくにそ不便なるちうくまう
しき風のこゝとく吹あけいらしおもへは
りこゝろしやいさくうろのおはさやすむと
うきおほてけるてはそれぬいろもあきて
こうるおほしくへてしおかしそすめ

不覚になり給ひにけりと見えしかひあまりかう
かうつゝこゝろものし給ひしかんあはれなりし
とこそ後にうけ給ひけれ此粟田殿の
御男君達三人そおはしましゝ太郎君は福足
君と申しゝを幼き人はさのみこそはとおもへと
といとあさましくまさなくあしくそおは
せし東三条殿の御賀にこの君舞をせ
させたてまつらんとてならはせ給ふほとも
ありしすまひ給へとよろつにをこつりいの
りをさへしてをしへきこえさするに

なりてつかうしまつりてまつりけるに舞
臺のうへのかりそめのしくものゝ調子ふきいつ
わかにおもしろくひゝきあはれなるにゆへしらぬ人
はしひゝきうつりゆく楽となくしてひゝきや
里まて栗田殿の家とまでうつりけるに家路
ひゝきあはれもしあはれ女のみをしるもありて
ある人さわりつゝこしとそのまつりとまつさやう
もなきにいふくちの中関白殿のとりつく
舞臺にのほりせよとそいひわたりてまつる
きの文みつきしたてゝ追わたさせぬつうさ

かくして絶りしに二代君と御腰のほとに
ひきつけさせたまひてつゝしつゝし
まうせ給ひしそ楽もいさりなりて
法君のいろちしられ其白兵てこれかい
まさりけりけり廻文殿しられしと也
あらまほしく文なしいたりなりてての人々
こそまかへりかる蔵しありけるやうりうり人
のかたなるけしきしところわれし
ましけるにゆきおもゑれさせぬまふりきん
二代君へいしもそかれ地にしかし

てあれと〳〵里ありしらぬよしのさまれて
ほと都すきし山の井の二郎君はしきれた
紫の播磨隆の大元の女是腹也は忠紫の播
乃君生界女をえさわ〳〵しわたるなり大郎
君と三条院の三の宮の子敦康親王中務宮
こ見さへ後しきりとも賀茂にて思ひつる
いとよきの中にて物しますなり又此君
なるわらは四人又東西の三郎都の中納
道綱の君を見君の祭の日物見しかへりし
車をそいとわけしりし右大将綱よりて

のたまりて餞のうちに御あそびまうりし
車にのりさへ乃うしそちれ歌よしりて
かちへ矢の歌よせられたりしさ後の奥
あのしなりが家式部の君守よまれく
侍りしさ
此にとつれもまなりねとしおみちまう
ら後もまうてゆからみれされ
まてうき風流とみしりき人のちりなき
ぬ都あまて賀茂明神の此やうにまうで
とふひたりしおちは便なしてやとそ

きこの君ハ故ありて逢ひかへしことのよし
仰ことありし頭にまかりてねかへさせ給ふ
まひのまへつきなるなとあるさまにて
ありし宰相殿参らせ給ひてかへりしまゐりたまふ
左衛門督なる一条をまうしわたりしまゐり給ひて
り帝東宮のありさまにかくありさまのつき
ゆかしとふかくこそきこえしそうしけり
きこしめされ仰さきなることにおもほしめし
男ちかまちなれて男君逢ひありし女君の御
兵衛の御気也女の御心地にてうけ

そなしましたしとやすみえ御さき
のくへやみ女御とさらし給ひ此大殿の
通ひ給ふ君の御子ともせ給ひしそうし
ゆへくるに佛神にもてくましし給ふ
し君は後の中宮に二条后の御子とてこ
そはしまさ又后女子なとかりかて宰
とそて給ひしたてゆかしけるにえてまり
給ひてなかさやしはありけれしても
女御ありしそれ后の御子宰相殿の
ゆかしは堀河殿の御子にて右大臣の御子

まてことさらにまいらせさせ給ひしか
すみ給ふ九条殿の御子の為光の君の女
御こしきれハこの粟田殿此御ありさまを見て
かはかりおほつかなくおはしますさかりに
さるへきものとて人々つかうまつりしか
られたりし夜のみやしろへおはしまして
こゝろさしふかき由殿御父おほしなりけれ
御夜なとうしなひまゐらせ給へり
てとりて御簾をあけ御前して御念誦
なとせしめてゆくへしらぬ

後撰古今ひろけて見給ひしあそひてつゐ
なけきをきゝてありそれにつけて世の御
ことまてまいりおもふにつけてよろつを
思ひとゝめすおほしめしつゝなかなか
うしろなけれとゝめおきまいらせなから
くらゐおもひすてしおもしろくは御
入道殿二条殿法師に落しおとしてまいら
ひきこもりしはしけれ